

道路がない「非常扉へ急げ」

高速道路の倒壊、陥没はあちこちで起きていた。野沢温泉スキー場から神戸に向かう帝産観光バスは、高架が横倒しになった東灘区深江本町から東へ三・四キロの阪神高速道路神戸線、西宮市本町に差し掛かった。神戸市の児童館職員佐々木純子(二五)は四列目の右窓側、同僚の小林利江(三三)は左窓側、小林の後ろに木田亜紀(三七)がいた。窓から中央分離帯のナトリウム灯の光が入る。間もなく三宮だ。

突然、白いせん光が地の底から走った。運転手の福本良夫(五二)は、目を疑った。次の瞬間、ナトリウム灯が一斉に消え、バスのヘッドライトが懐中電灯を回すような弧を描く。ハンドルが引っ張られ、車輪が不規則にバウンドする。バスの屋根に積もった雪が崩れ落ちる。

これ以上の運転は危険だ。フットブレーキを一杯に踏んだ。エアとオイルを併用した「エアオーバーハイドロリック式全輪制動ブレーキ」。六十キロの速度なら二十二メートル以内で停止する。だが、なかなか利かない。車の底が波打つ路面にぶつかり、衝撃が運転席に伝わる。バスが止まった瞬間、前輪が急に軽くなった。

運転席の隣にいた交代運転手の安井義政(三三)が「高速道が消えた」と叫んだ。

バスは運転席と前輪部二メートルが宙に浮いた状態で道路端に引っ掛かっていた。

対向車線を走ってきた白い乗用車がスーッと、暗やみの中に落ちていく。無声映画の世界だ。深い地の底から車の炎が噴き上げる。熱い風と真つ黒な煙がバスの車体を包み、少し開いた運転席の窓から入ってくる。

安井が「非常扉へ」と後ろを指さした。三人の女性はとっさに事故だと思った。木田が「はよ、降りよ」とベージュ色のマウンテンパーカーをはおった。外を見た佐々木の顔から血の気が引いた。事故より大きな何かが起きたのだ。

佐々木と木田は座席に置いたスポーツバッグを持ったが、小林の荷物はバスの格納庫に入れたままだった。

無言で顔を見合わせ非常扉へ急いだ。安井が非常扉のカバーをはずし、ドアを開けた。

福本は運転席に残った。動くと落ちるかもしれない。小林が「おっちゃん、はよ」。その言葉に励まされるように福本は、運転席をそと立った。床に足をこすりつけるようにして運転席から後退し始めた。客席の手すりをつかんだ。一列、二列と数えながら、進む。九列目の手すりに左手がかかった。非常扉まであと一つ。外の四人を確認して飛び出した。

ふだんは堅ろうな構造物である高速道路も、一部が落ちてしまうと不安定な姿をさらした。断がい絶壁に立たされているような恐ろしき足がすくむ。

そこへ、震度4の余震。高架橋が揺れた。道路にしゃがみ込んでいた小林が立ち上がり、炎に向かって夢遊病者のように歩きだした。四人は大声で呼び止めた。

危機や混乱に際して、人間は常識はずれの行動をとることがある。車外にいったん逃れた福本と安井は再び、落下寸前のバスに近づいた。小林がごくく愛着を持っているスキー用具「ロッシニョール」を車体下部にある格納庫から回収するた

めだ。

二人はロック解除ボタンを押してカバーを持ち上げた。

バスの宙づり部分からわずかに二メートル。いつ余震が来るかわからない。福本は腰をかかめ、上半身を格納庫にもぐり込ませた。もう一度余震が来たら、車体もろとも十一メートル下に転落するだろう。

安井が福本のベルトに手を添える。福本の手がスキー板に届いた。それを手渡すと、福本は「安全な場所へ逃げろ。わしらはバスの様子をもう少し見る。先に行って」と急がせた。

この時、福本も女性客も自分たちの乗ったバスが後に、阪神大震災を象徴する場面としてワシントン・ポストの一面を飾り、世界中に報道されることをもろろん知るよしもなかった。



転落寸前

阪神高速道路で前部を突き出した帝産観光バス(1月17日、本社ヘリから)